

2016.4.30 高木 涼将 (佐野加筆)

第110回 山口西田読書会 (前回109回4月16日のプロトコル)

参加者 佐野、唐露、谷、千葉、岡田、深野、高木、山口、山本、山名田、中嶋  
石川県西田幾多郎記念哲学館より学芸員2名がお見えになりました。

1. 『善の研究』第3篇第4章を読了

2. 要約

第3編第3章「意志の自由」第8段落

それで意識の自由というのは、自然の法則を破って偶然的に働くから自由であるのではない、かえって自己の自然に従うが故に自由である。理由なくして働くから自由であるのではない、能く理由を知るが故に自由であるのである。

意識の根柢たる理想的要素、換言すれば統一作用なる者は、かつて実在の編に論じた様に、自然の産物ではなくして、かえって自然はこの統一に由りて成立するのである。これは実に実在の根本たる無限の力であって、これを数量的に限定することはできない。全然自然の必然的法則以外に存する者である。我々の意志はこの力の発現なるが故に自由である、自然的法則の支配は受けない。

第3編第4章「価値的研究」第1段落

凡て現象或いは出来事を見るに二つの点よりすることができる。一は如何にして起こったか、また何故にかくあらざるべからざるかの原因もしくは理由の考究であり、一は何のために起こったかという目的の考究である。前者は単に物の成立の法則を研究する理論的研究であって、後者は物の活動の法則を研究する実践的研究である。

第2段落

いわゆる無機界の現象にては、何故に起こったかという事はあるが、何のためにということは無い、即ち目的がないといわねばならぬ。原因と目的が同一であり、それが外にあつて動かされると考えられる。しかし動かされるということがすでに自己を実現する合目的作用を含んでいるともいえる。動植物にいたると、自己の内面的目的というものが明らかになるとともに、原因と目的が区別されるようになり、全体の目的と一部の現象とは衝突を来す事がある。そこで我々は如何なる現象が最も目的に合うて居るか、現象の価値的研究をせねばならぬようになる。

第3段落

生物の現象ではその統一的目的なるものが人間が外よりくわえた想像と見ることもできるが、我々の意識現象はそのように見ることはできない。意識現象は統一した一活動である。思惟、想像、意志の作用についてはいかに起るかより、いかに考え、いかに想像し、いかに意志するかが第一の問題である。

第4段落

存在の法則より価値の法則を導き出すことはできない。存在の法則は原因もしくは理由に基づくが、価値の法則は目的ないし要求・欲望という別の原理に基づくからである。そうして我々の欲望または要求なるものは説明し得べからざる直接経験の事実であるのみならず、かえって我々が之に由って実在を理解する秘鑰である。

講義は本日の討論の柱「西田は『善の研究』第3篇で純粹経験の立場を逸脱しているのではないか」に沿って進められた。